

かめのり大学院留学アジア奨学生

## 月次報告レポート

(2017年6月)

### 1、研究について

6月の前半は、先月の続きに投稿論文の校正に時間を使いました。たぶん最後の校正となるので、また何度も読んだ論文を細かく点検しました。

そして、6月の後半では、先行研究を整理しつつ、次の研究の史料を収集する作業を進めていきました。張謇の先行研究については、日本と比べ、中国の研究がやや多いが、張謇を実業家として取り上げた研究が多くしめています。それとの関係から、近年は彼の「父教育而母実業」の理念に注目し、彼の教育思想を注目する研究もいくつかあった。

まず日本では、すでに1955年に辛亥革命との関係に注目した研究が出てきました。野沢豊が民国の企業の運命に注目し、「中国の半植民地化と企業の運命」で一企業家の張謇について論じました（『東京教育大学東洋史学論集4』東京教育大学、1955年）。また、藤岡喜久男は張謇が辛亥革命における活動に焦点をあて、辛亥革命における張謇の役割を指摘した。（『儒教「異端」の革命思想—辛亥革命に於ける張謇』共同文化社、2010年）そして、中井英基（『張謇と中国近代企業』1996年）や于臣（『渋沢栄一と「義利」思想—近代東アジアの実業と教育』2008年）は張謇の実業思想について、それぞれ論じました。そのなか、于臣が教育思想も論じましたが、ほとんど実業思想（「義利」思想）とセットで論じられました。

次に、中国では、張謇の思想や活動についての研究が多くあり、教育思想に関しては、瞿立鶴をはじめ、張蘭馨、王敦琴などの研究は主に張謇を中国教育の「近代化」に貢献したと評価するが、革命（或いは「民主」「新民」）に対して「保守的」な一面を彼（或いはブルジョアとして）の限界と捉えた（瞿立鶴『張謇的教育思想』（台湾）学生書局、1976年、張蘭馨『張謇教育思想研究』遼寧教育出版社、1994年、王敦琴『張謇と近代新式教育』人民出版社、2015年）。そのなか、一番最新の研究として、王敦琴らは、張謇の教育思想をまとめた上に、張謇と羅振玉・黄炎培・梁啓超との比較も行い、張謇の教育思想および教育活動の位置づけを試してみた。

### 2、生活について

6月はやっと少し落ち着いたので、友達と一緒に大人気のミュシャ展を見に行きました。今回ミュシャ展の見どころは、古代から近代に至るスラヴ民族の苦難と栄光の歴史を描いた『スラヴ叙事詩』（1912-26年）です。この『スラヴ叙事詩』をチェコ国外では世界で初めて、全20点まとめて公開するものです。一度しかいないチャンスかもしれないので、会期が終わる前に行きました。さすが大人気の展示で、チケットを買って、展示室に入る前に50分も待っていました。しかし、それは待つことに値するものであった。展示室に入ると、すぐそのおよそ縦6メートル、横8メートルに及ぶ油彩画に目を奪われた。その明暗を見事に表現し、幻のような絵が物語を語っていました。後で図録を買いましたが、やはり原物のほうが感動的でした（美術館の照明がよく仕事してくれたからかもしれません（笑））。